

『開設50周年セミナー』

テーマ:日本語はどのような言語か —内から見た日本語, 外から見た日本語

2016年9月4日(日)

場所:国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 セミナー室 102号室

(小田急線 参宮橋駅徒歩約7分) 要事前申込

10:00-16:10

音韻論の課題 — 日本語音声の研究を中心に

窪 蘭 晴夫(国立国語研究所)

日本語学の課題 — 「記述」と「理論」の壁を越えて—

三宅 知宏(大阪大学)

社会言語学の課題 — ことばの選択を考える

嶋田 珠巳(明海大学)

生成文法の課題 — 人間の言語知識の解明に向けて

高橋 将一(青山学院大学)

認知言語学の課題 — 文化解釈の沃野

大堀 壽夫(東京大学)

○統括コメント

・上野 善道(東京大学名誉教授)

・大津 由紀雄(明海大学教授)

## 東京言語研究所50周年記念リレー講義 「ことばの科学—将来への課題」

### ●音韻論の課題 — 日本語音声の研究を中心に

窪 蘭 晴夫(国立国語研究所)

本講義においては母音、子音、音節構造、アクセント、リズムなどについて日本語の音韻特徴を対照言語学、言語類型論の視点から概観した上で、日本語音声について今後の研究課題を考察する。とりわけ、日本語アクセントの研究から日本語の他の構造(たとえば音節構造)にどのような知見が得られるか、方言研究や言語獲得研究を含む日本語の音韻論研究が一般言語学、言語理論、言語類型論の研究にどのように貢献できるかを検討する。

### ●認知言語学の課題 — 文化解釈の沃野

大堀 壽夫(東京大学)

意味論の一つの課題として、語の意味を社会・文化的文脈の中でとらえ、そこに生きる人々がどのように世界を経験しているかを明らかにする作業がある。日本では九鬼周造(1930)『「いき」の構造』が著名であり、ヨーロッパ人文学の伝統に立つ C.S. Lewis (1967, 2nd ed.) *Studies in Words* も重要な研究である。この発表では、認知言語学と共に談話分析の知見も取り入れつつ、単語の社会・文化的意味について考える。それは人間科学としての認知研究の解釈的側面の発展に寄与することが期待される。

### ●生成文法の課題 — 人間の言語知識の解明に向けて

高橋 将一(青山学院大学)

生成文法では、「人間言語の知識」の解明を研究目標とする。生成文法の誕生以来、理論の発展が進む現状で、この目標に到達するために、私たちが今後取るべき研究アプローチとは、どのようなものかという問いを考える。当然、この問いに対する答えは一つではないと思われるが、ここでは「理論とデータのさらなる融合」の重要性を併合操作の観点から取り上げる。また、今後さらに推進すべき研究スタイルとしての「知の集結」の有用性を考える。

## ●社会言語学の課題 — ことばの選択を考える

嶋田 珠巳(明海大学)

相手に応じて、状況に応じて、ことばを選ぶこと。複数言語使用環境における個人の言語の選択。ひとつの国がたとえば英語とどうつきあっていくかという問題。

社会言語学は「ことばの選択」についてなにを語り、未来にむけてなにを問い、なにを生み出すことができるのか。本発表では、土着のことばであるアイルランド語から英語への言語交替を経験したアイルランドにみる、言語をめぐる諸現象を中心に、ことばの選択について具体的に考える。日本における英語、そして日本語のこれからを考える手がかりを得たい。

## ●日本語学の課題 — 「記述」と「理論」の壁を越えて

三宅 知宏(大阪大学)

本発表の目的は、共時的な日本語研究、とりわけ「文法」(統語論／形態論／意味論・語用論の一部を含む)と呼ばれる分野において、これからの課題と考えられることを述べることにある。この分野は、現在、「記述」ということを前面に出す研究と、生成文法や認知言語学等の、特定の「理論」に基づく研究との間に「壁」があるように思われる。このような現状は望ましくないという立場から、両者の相互活性化につながる方策を探る。